

メッセージアウトライン 創世記20:1~18「アブラハムとアビメレク」

[1-2]「アブラハムは、そこからネゲブの地方へ移り、カデシュとシュルの間に住んだ。ゲラルに寄留していたとき、アブラハムは、自分の妻サラのことを、『これは私の妹です』と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、人を遣わしてサラを召し入れた」

「そこから」ヘブロンから。「カデシュ」ヘブロンから約120km南西の地。「シュル」さらに南西のエジプト国境近く。カデシュとシュルの間にパレスチナとエジプトを結ぶ通商路が通っていた。アブラハムとその一族は遊牧民としてこの二つの地点の間を移動しながら生活していたのであろう。

「ゲラルに寄留していたとき」ゲラルはヘブロンより約50km南西の地。ここはペリシテ人の地であるが、後のイスラエル人との間のような敵対関係はまだなかった。

アブラハムは、自分の妻サラのことを「これは私の妹です」と言った。これはどこかで聞いたセリフである。→創世記12:11~13 彼はエジプトで痛い目にあっただけなのに、ここで同じ愚をまた繰り返している。「アビメレク」…「王は私の父」の意。エジプトのファラオと同様に個人の名前ではなく王としての称号と思われる。「サラを召し入れた」これは正妻としてではなく、側室（そばめ）のひとりとしてであろう。サラはこの時九十歳であったが、神が約束されたようにやがて子を産もうとしているので、外見的にも肉体的にも超自然的に若返っていたのではないだろうか。

[3]「その夜、神が夢の中でアビメレクのところに来て、こう仰せられた」

神がアビメレクに語られること自体、彼が偶像の神々ではなく、ある程度の王の王、主の主である真の神に関する知識を持っていたと思われる。「見よ。あなたは、自分が召し入れた女のために死ぬことになる」後の17節からもわかるように、アビメレクは神から警告を受けたとき、神によって病気になっていたと考えられる。「あの女は夫のある身だ」アビメレクはこれを聞いて非常に驚いたことであろう。

[4-5] [アビメレクは、まだ彼女に近づいていなかった] これはおそらく彼が神によって病気にされたためであろう。「主よ。あなたは正しい国民さえも殺されるのですか」これは主なる神が正義の神であり。人をさばく権威を持ったお方であることを彼が知っていたことを示している。彼が「国民」と言ったのは、彼個人の問題でありながら、その刑罰が国民にも及ぶようになると考えたからであろう。彼がこのように言ったのは17~18節からもわかるように、その妻や女奴隷たちが不妊になっていたことも背景にあるであろう。「正しい」これはアダム以来の罪の性質を彼らが持っていないという意味ではなく、世間一般から見てもやましいことをしていないという意味である。異邦人の王アビメレクはこのように熱心に主にとりなしをしている。しかし、アブラハムはサラの件で嘘をついて、沈黙している。まるで立場が逆転したかのようである。「……私は、全き心と汚れのない手で、このことをしたのです」これは罰せられなければならないような罪

を犯してはいない。まして殺されなければならないような理由はないとの訴えである。彼はアブラハムとサラの両者から彼らが夫婦ではないことを確認している。(5)

[6] 神はここでアビメレクの達し得た段階での最善を認められる。しかし、それは彼の取った行動をよしと受け入れておられるわけではない。神のみこころはあくまでも創世記2:24にあるように一夫一妻制である。ここで神が認めておられるのはアビメレクの達し得た段階での正しさであり、それゆえ神は彼がこの件で神の前に罪ある者とならないように、彼女に触れることを許さなかったと言われる。神は彼を病気にされたのであろう。

[7] 神はアブラハムの妻を返すべきこと、もし返さなければ、彼も彼に属する者もすべて死ぬことになると告げられる。「あの人は預言者であって」ここでは人に代わって神に語る者の意と思われる。何を語るかといえば、「あなたのために祈ってくれるだろう」とあるようにアビメレクと彼に属するすべての者が死なないように、病や不妊が癒されるようにとのとりなしの祈りである。

[8-10] 翌朝このことを聞いたアビメレクのしもべたちは非常に恐れた。(8) これは自分たちが知らないうちに死の瀬戸際に立たされていたことから来る恐れであったであろう。

そしてアビメレクはアブラハムを呼び寄せて叱責する。「……あなたは、してはならないことを私にしたのだ」(9) アブラハムがこのことを異邦人であるアビメレクから教えられなければならないとは非常な屈辱であったに違いない。答えることができないアブラハムにさらにアビメレクの詰問が迫る。「あなたはなぜ、こんなことをしたのか」(10)

[11-13] 「この地方には、神を恐れることが全くないので、人々がわたしの妻のゆえに私を殺すと思ったのです」(11) とアブラハムは答えた。一応納得できるようではあるが、すべての国や地方にそれを当てはめることはできないであろう。アビメレクとその国には霊的なことについて多くの無知や誤解があったであろう。しかし、目には見えないけれども、この世界の背後におられる崇高で近づくことのできない神という存在に対する恐れもあったのではないか。この日本においても真の神を知らず、わからなくても、その代替え品の八百万の神々が満ちている。私たち人間は創世記1:26にあるように、神のかたちに造られたものであるゆえに、たとえその思いが真の神から遠く離れ、無知に陥っていたとしても霊的なもの、宗教的なものを求める思いがあるのではないか。しかし、代替え品の人間の頭が作りだした偶像では決して満たされることはないことも事実である。

アブラハムが神から受けていた多くの恵みをアビメレクは受けていなかった。そのアビメレクが見せた誠実さ、正しさに比べるとアブラハムが取った行動に弁解の余地はない。問題は異邦人のアビメレクではなく、アブラハムの神に対する信頼の不足、不信仰があったのである。

彼はサラはアブラハムにとって異母妹であったと弁解するが(12) しかし今の二人の関係は夫婦であるのでこの言い訳は通用しない。また、アブラハムを兄と呼ぶことはカナンへの旅に先立ってのサラとの約束事であった(13) とも釈明するが、これは来たるべき危

険に対する人間的な知恵であり、それがかえって、エジプトや今回のゲラルでの危険と不面目を招くことになってしまったのである。

[14-15] アブラハムの苦しい弁解の後、アビメレクはサラを返すとともに、アブラハムに豊かな贈り物をした。→羊の群れと牛の群れと、男女の奴隷たち。これはアブラハムの立場に一定の理解を示すとともに、これ以上サラを手もとにとどめることは自分の身の破滅になることを彼がよく分かっていたからであろう。さらに彼は自分の領地のどこにでもアブラハムとその一族が住む許可を与えた。アブラハムはじつくりと腰を落ち着けて住むことができるのである。

[16] 「サラに対しては、こう言った。『ここに、銀千枚をあなたの兄に与える。これはあなたにとって、また一緒にいるすべての人にとって、あなたを守るものとなるだろう。これであなたは、すべての人の前で正しいとされるだろう。』」

「銀千枚」当時銀三十枚が奴隷の価格であったので銀千枚は巨額である。これはアビメレクの権威をあらわすとともに、彼の誠意を示すものであっただろう。「あなたを守るものとなるだろう」王である者が遊牧民に価値ある贈り物をしたということは、彼らを価値ある者として認めたということで、それゆえに他の者が彼らを批判したり責めたりすることはできないのである。「これであなたは、すべての人の前で正しいとされるだろう」これですべてが決定されるの意。

[17-18] 「そこで、アブラハムは神に祈った」アビメレクの病と妻や女奴隷たちの不妊状態からの癒しと解放の祈りである。「神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒されたので。彼らは再び子を産むようになった。主が、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたのである」

この箇所から私たちは何を学ぶことができるか。それは神に対する信仰を持っている者といえども、その歩みは順調な時ばかりではなく、不信仰に陥り、失敗や危険に直面するという事、それでも主は導き守ってくださるということ、真の神を知らない人々の態度や生き方を通して、かえって信仰者のほうが教えられ、不信仰に気づかされ、悔い改めさせられるということ、そのような様々な出来事を通してなおも神のみわざが進められていくということである。

私たちも様々な弱さを持っており、人生において何度も同じような失敗をする。しかし神は私たちのそのような弱さをよく御存じであり、あえてそのような失敗を通して私たちに訓練され、それによって私たちは不信仰を悔い改め、主の恵みに寄りすがり、もう一度立ち上がって主に従っていくことができるのである。

私たちは順調な時も逆境の時でも、なお私たちのすべてをご存じである主なる神にのみ目を上げて、そこに希望を置いて歩いていくことが大切である。

→ I コリント 10:13